



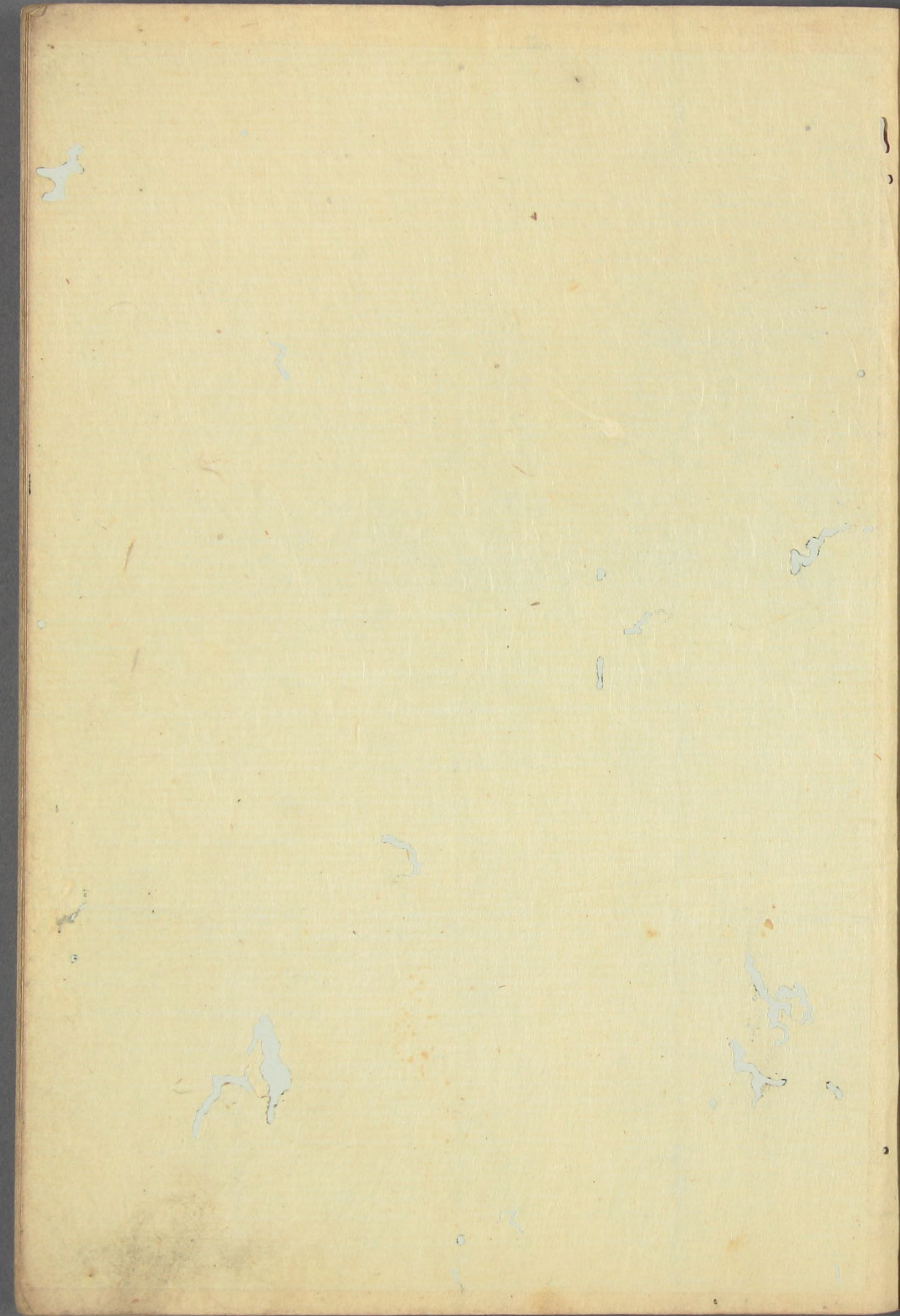
和歌

決別抄

特別
イ 4
3163
89









六部抄第三

和歌庭訓抄

一名毎月抄

本家良公初撰六帖如新



此書、衣笠内大片實家公の著と云ふ所也

此内府、定家河内三人の著也第一の河内、源家の

太刀片源玄胡公

右人の孫の息、源家の舎弟

源家三代の軍也

西園寺公任公の息

第二常盤井相國實氏公ト云

次、此内府也

衣笠殿、西園寺の源家、當代此家の後、此内府の後、終也

續後撰小内大片基と云ふ、此人也此書、當代、當安の内府二人おとす一人、此實家公一人、内府、源家公、鶴殿ト称ス、後京極の孫政良經公の息也是、徳後撰集、小内大片家と云ふ



世シ 徳百今ニ内大に基りては格別ノ人ナリ此徳百今ニ余ハ内大に又  
光の路を入道前極政良臣ト入レシカハ此徳百今内大にト見余ハ人

和歌庭訓と云ふ歌之ハ和歌ハ女國の風俗ニシテ神代より

のころよりありしれバ代々乃帝も是よりハ女國の物類ニ

多しと云ふ時代の玉風とも考へし昔も女國政の

基とせり也 唐朝詩經のころより 庭訓と云ふの歌

と訓ニシテ人ノ善悪のいふりあり又のふら曲ノ節

子小あやうし 鯉走過庭

庭訓と云ふ聖人孔子ノ語ヲ釋シ過庭曰學詩也子未之入而不學詩則

如牆面而立云と梅若孫ノ子といふも強より庭訓と云ふも古

徳のいふりありし也 庭訓と云ふの意は此の如し也 庭訓と云ふ

是より云ふは此の十種の内ニ一なりと云ふ也 庭訓と云ふ

洪お小夏十種の内ニ一なりと云ふ也 庭訓と云ふ

つと要と云ふは此の凡ニ各一編の内ニ一なりと云ふ也

庭訓と云ふは此の凡ニ各一編の内ニ一なりと云ふ也

小山正 是書之強原也 といふ人全書

基後傳 後成卿 皇太后字大式五女三三三三

後成卿 法并以後法若紙の又五三三

定家 為家卿 為家 四子九ト云是ニ各一編ト云

為家 為家 次男是ヲ為家ト云 為家 一流ハ為家後書

此の公伝ハ為家口ノ實母ニ為家ハ後母ノ何ハ一流ト云ク

此トシラレシ此の公伝の就文ハ此の公伝 此の公伝ハ此の公伝

此の公伝ハ此の公伝 此の公伝ハ此の公伝 此の公伝ハ此の公伝

此の公伝ハ此の公伝 此の公伝ハ此の公伝 此の公伝ハ此の公伝



第一の文式 定家作 是の論考を又長谷川道玄に譲る也 第二の古風体は 定家

第三の古庭訓は 定家の也 然るに内府の定家と別れ也 第四の古風体

或は拙体凡そ 多岐に也 第五の古風体 何れも定家 第六の古風体

凡所抄 後善光院 極政良基の也 良基は二条の先祖也 何れも定

道に傳ふも 中古の道再興の也 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 今二条の家一流の也 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定

家の也 是れは二条の先祖也 何れも定 是れは二条の先祖也 何れも定















長音と濁がみ只りの〜海〜うの〜を急次入〜  
先師も長音より短音短歌混本筆の極〜乃多辨混  
雜下し短歌極〜の〜大石万葉乃皆長音と  
し〜三十一字の咏と反神〜は長音乃物に詠して  
三十一字の句に〜つれせぬ〜は中〜の長音あ〜と  
集友上石根源の勅撰〜し〜出流其詠と句の  
可り古今に覺え〜者存〜三十一字之詠今反歌之作  
〜と〜三十一字の句〜の反音あれ其是と今の其  
す〜と〜れ〜り △〜初ん〜今又乃ん〜  
時々通〜す子乃ん〜人〜  
〜ゆん〜  
〜紙〜有

百字の辨其乃〜の〜部正の〜  
の〜と〜け〜撰〜の〜記混の〜 之長音  
反音短音あり詔潜混本施<sup>ホ</sup>或〜  
等道〜上〜の正部の長音あ〜  
一語〜と〜又百字の長音あり  
中〜其善要を思方て〜  
此句〜 百字の長音の〜  
者〜  
詩〜  
保白の如〜







よむまじなまの祖と云ふ。あまらに俗<sup>ソウ</sup>と云ふ。又或る  
者ある教<sup>キョウ</sup>のと尸<sup>シ</sup>。其くまねと云ふ。今定<sup>サ</sup>ん  
に及むと。此<sup>コノ</sup>下<sup>ノ</sup>の科<sup>カ</sup>のるま<sup>マ</sup>と云ふ。○

法

しりしと云ふ。法<sup>ホウ</sup>のり<sup>リ</sup>はあり。俗<sup>ソウ</sup>と云ふ。又  
もあつた教<sup>キョウ</sup>のと尸<sup>シ</sup>。其くまねと云ふ。今定<sup>サ</sup>ん  
くまねと云ふ。法<sup>ホウ</sup>のり<sup>リ</sup>はあり。俗<sup>ソウ</sup>と云ふ。又  
のり<sup>リ</sup>と云ふ。法<sup>ホウ</sup>のり<sup>リ</sup>はあり。俗<sup>ソウ</sup>と云ふ。又  
と云ふ。法<sup>ホウ</sup>のり<sup>リ</sup>はあり。俗<sup>ソウ</sup>と云ふ。又  
り<sup>リ</sup>と云ふ。法<sup>ホウ</sup>のり<sup>リ</sup>はあり。俗<sup>ソウ</sup>と云ふ。又  
又と云ふ。法<sup>ホウ</sup>のり<sup>リ</sup>はあり。俗<sup>ソウ</sup>と云ふ。又  
きは法<sup>ホウ</sup>のり<sup>リ</sup>はあり。俗<sup>ソウ</sup>と云ふ。又  
るも法<sup>ホウ</sup>のり<sup>リ</sup>はあり。俗<sup>ソウ</sup>と云ふ。又

○よむまじなまの祖と云ふ。あまらに俗<sup>ソウ</sup>と云ふ。又或る  
者ある教<sup>キョウ</sup>のと尸<sup>シ</sup>。其くまねと云ふ。今定<sup>サ</sup>ん  
に及むと。此<sup>コノ</sup>下<sup>ノ</sup>の科<sup>カ</sup>のるま<sup>マ</sup>と云ふ。○



よのちまゝにいかにいへるをう  
りたるものなかりしをうりしとみ又いらを録しよ  
と成にうのかりしとみは後と通するもよ  
の記をうりし言の記にいなる俗態のいられは是と用  
わうにうりし言の記にいなる俗態のいられは是と用  
解めしと也又あきらしとさうのあうのいといりち  
のうりし言の記にいなる俗態のいられは是と用  
いりちのうりし言の記にいなる俗態のいられは是と用  
しきうりし言の記にいなる俗態のいられは是と用  
うりし言の記にいなる俗態のいられは是と用

巻のうりし言の記にいなる俗態のいられは是と用  
いりちのうりし言の記にいなる俗態のいられは是と用  
しきうりし言の記にいなる俗態のいられは是と用  
うりし言の記にいなる俗態のいられは是と用

いりちのうりし言の記にいなる俗態のいられは是と用  
しきうりし言の記にいなる俗態のいられは是と用  
うりし言の記にいなる俗態のいられは是と用























いふの事よはた女房のしつうふちまゝいふ  
されにうふふ思ふ物をもいひのちかへん  
はうもふらう思ふふはうも思ふうも  
人のつひよりいふはうも思ふうも思ふ  
わうも思ふうも思ふうも思ふうも思ふ  
但ふも思ふうも思ふうも思ふうも思ふ  
よ思ふうも思ふうも思ふうも思ふ  
して天衣持統うも思ふうも思ふ  
まを平けくわきまゐる女帝世に治りたる如  
うも思ふうも思ふうも思ふうも思ふ

いふの事よはた女房のしつうふちまゝいふ  
されにうふふ思ふ物をもいひのちかへん  
はうもふらう思ふふはうも思ふうも思ふ  
人のつひよりいふはうも思ふうも思ふ  
わうも思ふうも思ふうも思ふうも思ふ  
但ふも思ふうも思ふうも思ふうも思ふ  
よ思ふうも思ふうも思ふうも思ふ  
して天衣持統うも思ふうも思ふ  
まを平けくわきまゐる女帝世に治りたる如  
うも思ふうも思ふうも思ふうも思ふ

いふの事よはた女房のしつうふちまゝいふ  
されにうふふ思ふ物をもいひのちかへん  
はうもふらう思ふふはうも思ふうも思ふ  
人のつひよりいふはうも思ふうも思ふ  
わうも思ふうも思ふうも思ふうも思ふ  
但ふも思ふうも思ふうも思ふうも思ふ  
よ思ふうも思ふうも思ふうも思ふ  
して天衣持統うも思ふうも思ふ  
まを平けくわきまゐる女帝世に治りたる如  
うも思ふうも思ふうも思ふうも思ふ







は今も此をどうもいふに堪へぬ入ぬ——として世を去らば  
の事といふ境はよ入る境は又世を去らば秀が如くはよも  
の事といふ境はよ入る境は又世を去らば秀が如くはよも  
りしをいふに堪へぬ入ぬ——として世を去らば  
は世を去らば秀が如くはよも入る境は又世を去らば秀が  
大畧百人首も世を去らば秀が如くはよも入る境は又世を去らば秀が

いふに堪へぬ入ぬ——として世を去らば秀が如くはよも  
わは世を去らば秀が如くはよも入る境は又世を去らば秀が  
いふに堪へぬ入ぬ——として世を去らば秀が如くはよも  
らわは世を去らば秀が如くはよも入る境は又世を去らば秀が

いふに堪へぬ入ぬ——として世を去らば秀が如くはよも  
わは世を去らば秀が如くはよも入る境は又世を去らば秀が

いふに堪へぬ入ぬ——として世を去らば秀が如くはよも  
らわは世を去らば秀が如くはよも入る境は又世を去らば秀が  
いふに堪へぬ入ぬ——として世を去らば秀が如くはよも  
わは世を去らば秀が如くはよも入る境は又世を去らば秀が  
いふに堪へぬ入ぬ——として世を去らば秀が如くはよも  
らわは世を去らば秀が如くはよも入る境は又世を去らば秀が



















ふり出来せばとわらふもよらん〜とあられたれば  
性骨もよらん〜と年々結核の病もよらん時をえ  
業気の病もよらん〜と病の病もよらん時をえ  
ふらふとわらふもよらん〜と病の病もよらん  
よらん〜と病の病もよらん

個にすく〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん  
わらふ〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん  
ららん〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん  
わらふ〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん

ふらふ〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん  
わらふ〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん  
ららん〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん  
わらふ〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん  
ららん〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん  
わらふ〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん  
ららん〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん  
わらふ〜と病の病もよらん〜と病の病もよらん























































































考のくはるはなほ中とて出づるは  
群とてはなほ給ふるは其をくはるはなほ  
よとてはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
名を人としてしめてしめてしめてしめて  
らるるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
東のまはるの人のあつてはなほ給ふるはなほ  
なほ給ふるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
のなほ給ふるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ

のなほ給ふるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ

又考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ

又考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ  
考のくはるはなほ給ふるはなほ給ふるはなほ



















Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.











いづれか

いづれか痛むれば治すべし  
なり平臥痛むれば治すべし  
なり平臥痛むれば治すべし  
痛むれば治すべし

又いづれか痛むれば治すべし  
なり平臥痛むれば治すべし  
なり平臥痛むれば治すべし  
痛むれば治すべし

いづれか痛むれば治すべし  
なり平臥痛むれば治すべし  
なり平臥痛むれば治すべし  
痛むれば治すべし











あゝぬえををがりくれ

川新友今冬

善結

後しよしにらるふお招きの者や

とけはんよ

かろしむるもかゝるも日歌の回

もあはらふお字も歌あれとも考

の終りれいりりしりり

いさよの越よくくるのよして

とらていはいいはいい

いはいはいはいはい

のあゝいはいはい

いはいのあゝいはい

あゝいはいはいはい

あゝいはいはいはい

あゝいはいはいはい

あゝいはいはいはい

あゝいはいはいはい



舟中是ハ二有又ハ六等式ハ十有なるの遊覧を性吟にまよふとまよひ  
 んはらうちけ辰別林せしむにそハあなれととんゆを計  
 砂まを困ハとちめハまよふと 毎そたけりしむとまよふと  
 ちた神のまにまよふと風とまよふと潮とまよふ人にまよふにまよふにまよふ  
 敷の河とまよふと毎まよふとまよふと雨も風も雲もまよふとまよふと  
 との河又ハまよふと是ハ川まよふとまよふと潮とまよふと別すまよふと  
 らに物中風も雲も敷の河に毎まよふとまよふとまよふと今  
 是と別ハまよふとまよふと身たら河とまよふとまよふと身まよふと潮  
 ハ同雨もまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふと  
 魚 大船のまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふと  
 舟の河に毎まよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふと  
 ちまの毎まよふとまよふと敷の河に毎まよふとまよふとまよふとまよふと  
 潮にまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふと  
 まよふと地盤に人の癖のまよふとまよふとまよふとまよふとまよふと  
 のまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふと  
 てまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふと  
 んまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふと  
 めまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふと  
 とりまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふとまよふと  
 りけてまよふとまよふと潮のまよふとまよふとまよふとまよふと



と伴ののこせは後感のこころにのこるものなりとていふことありしは  
は後感のありしをいふことありしなり

春風。タラレ。まよふの道にあらんことありしはまよふこと  
それとあらんまよふことありしはまよふことありしはまよふこと  
たよむことありしはまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは

○は後感の事し 何れも、タラレのまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは

まよふことありしは

春のまよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは  
まよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは

○春時のまよふことありしはまよふことありしはまよふことありしは







作んとて市に河と市に月いふまじくよまじりていざあ  
のちと形しくなりてさうくうくさうりあむのふふ如  
てこそと市終にありてあれふのけけ月いふは志を切念の目まに  
ハ河と市に月とて月物と名巻しつもの程漢詩の上花枝アリ  
詩ハ 碧梧 儂栖 風凰 枝 牡子美の句也

おに 一いこいびさう一今のちるれもさびしうかたのそあき  
杜子美詩ハ風凰すけうは碧梧の枝とふんこそれとて後に月いふ  
諸翁とくく句曲ありて特倒して月いふも又蘇東のいふ  
さう今まうこのちるれもさうと句と特倒して月いふも

是と今まう一いして利の味うちれも句曲あり又すいそこのり  
うううまうまう一今と句と市用い語さうそ風物とけしと語も  
つていふもさうゆあ(是ホホの地旅の志字ハの標置)うねんり  
あふんふもゆあて名巻ものねんりさうとさういふもさう初ん未  
達ののいふもせぬりとの智恵を明とねんりしてあのみさういふ  
さういふもねんりさう例の明りもさうの秋をいふさういふ  
一あしうくあゆもさういふさういふ

△所記神妙とて河と市とあふにさうてあふさうの律あつ  
とすれとて美辨のさういふさういふさういふさういふのそあつ















うんん出を辨とすむすのふとそとに法にのつ風にいんそそと  
割拂りてまらむとあつていふかあといひたのふあつていふあつていふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
うまを加て世のふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
戒一も心

但佛の流まのらまの法はも豊のあよりそあつとるや。それ  
よとつたにだつた。あつていふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
まんまもいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
哥とていふとあつていふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

あつていふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

そとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそと  
法音涅槃の法ぶつて根持おぬの法をかかすといふかあつていふ  
心とつていふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
以下の句は師絶とるん人のいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
拉鬼辨といふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
あつていふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
するの世のえらていふかあつていふいふいふいふいふいふいふいふ



かじめそののちしよの別とるく強らふのそふていよあふ  
といふに西く乃の藤澤なりといふ

△そののちかんは御の下にそのけいこの日の休指とくと之部で  
けのていんもつれと種<sup>性</sup>の風とあしよと先ゆの休指と窓の  
てんそそと後に風体とあといふ

△このていんもつれと種<sup>性</sup>の風とあしよと先ゆの休指と窓の  
けのていんもつれと種<sup>性</sup>の風とあしよと先ゆの休指と窓の  
てんそそと後に風体とあといふ

んごらそのあうにゆの体とてなるのそとていんもつれと種<sup>性</sup>の風とあしよと先ゆの休指と窓の

種<sup>性</sup>

それとて又もつれは命して種<sup>性</sup>とていんもつれと種<sup>性</sup>の風とあしよと先ゆの休指と窓の  
けのていんもつれと種<sup>性</sup>の風とあしよと先ゆの休指と窓の  
てんそそと後に風体とあといふ

は彼が下敷席依之奉井塔城百き美新之程は之今葉の布を  
はねて紀えていんもつれと種<sup>性</sup>の風とあしよと先ゆの休指と窓の

塔城百き美新之程は之今葉の布を  
はねて紀えていんもつれと種<sup>性</sup>の風とあしよと先ゆの休指と窓の



えいそくをせしむる所を此にせよ先をよむはうしむるをせしむる  
所の辨るれいそくを辨と地盤ありともく正風有ん西路よ  
こもてきて能くまうて後は又余の辨もしししししし  
余を辨とよむるをその辨るる所しししししししししし  
とよせしめておぼしんせししししししししししししし  
先づの辨ありしししししししししししししししししし  
さかしししししししししししししししししししししし  
おそいししししししししししししししししししししし  
のいしししししししししししししししししししししし

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
深のまのよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
さうぬ邪路小換入者るは是自故の辨るるしししししし  
辨るるにせしめられしししししししししししししししし  
ては辨るるをよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
ては辨るるをよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

今の世の中へは成るるが。おぼしむる者のいしししししし  
このをせしむるを辨るるしししししししししししししし  
きりふらむとてぬわてゆか











































徳政堂と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)

海松と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)

徳政と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)

(徳政)

去ぬ<sup>し</sup>元之の比(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)

徳政と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)  
の(徳政)と云ふこと(その)早下の類(今)府政の(徳政)











くわんをいしつて詩の句とをふたれ月ひよりよき世の時代に  
 ありまるとしと新詩の七言の句は下録を秦苑夕蟬鳴却  
 葉漢宮秋又長恨哥句小春風桃李花四日 秋露梧桐  
 葉落時うとつ句は皆家か一今何れか小春風は  
 志がうこのまじ時をまさんばうらむのやゆらん  
 漢宮秋云 志がうこのまじ又かのうらむとあそくせ無う  
 このまじう時をまさんば詩のまじとあそく又詩のまじ自由  
 只このまじうらむとあそく又今とあそくまじにまじ  
 まじのまじうらむとあそく

常小白氏文集第一第二の巻の中に大要なる所ありね成教え  
 せん

常小白氏文集と云ふは是れ漢書の中にも今世の流布の白氏文集と云ふ  
 氏文集と云ふの昔漢の白氏文集今世は定まらぬ時代  
 小は白氏文集第一第二の巻の中は世根が長選りたる歌  
 いろいろは他選りたるを文集と云ふなりともも文集の中の  
 世根が長選りたるの歌の類はよく取ひらるる事よん  
 たり後集の事と作らざらん



詩はくはまのむすめ

長威家云 詩は彼皇太子の御息所と澄して二帝家よりうり  
の御息所と澄して後々の御息所と澄して皇太子の御  
有公の御息所と澄して高麗の御息所と澄して御息所と澄して  
世も人の言ふ御息所と澄して

尤も時を人の御息所と澄して御息所と澄して  
吟も今を御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して  
よもくはまのむすめ

長威家云 貴人の御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して

ゆめもむすめに御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して  
の長威家云 今を御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して  
御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して  
昔は御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して  
も御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して

長威家云 武家の御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して  
御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して  
御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して  
御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して御息所と澄して











下院抄神書古と神書も用と同一のしるべは百と神書の  
ういふよ初んはむとてしむいひしむよとてかどめしは

信成家云 晴の合帝のとき抄書もまた音抄多くしむるは  
ういふ抄書もくはしむいひしむの合同いひしむのしるべは  
首抄の書はむとて初んはむとて初連の合しむるはむとて  
浦和云 晴の合帝のとき抄書もまた音抄多くしむるは  
とてしむるはむとて初んはむとて初連の合しむるはむとて  
抄書の合帝のとき抄書もまた音抄多くしむるは  
ういふ抄書もくはしむいひしむの合同いひしむのしるべは  
初抄大書も百とて人教定りしむとて初連はむとて初連はむ

初んはむとて初連の合しむるはむとて初連はむ  
初んはむとて初連の合しむるはむとて初連はむ  
初んはむとて初連の合しむるはむとて初連はむ

信成家云 是の初抄書もまた音抄多くしむるは  
て初連はむとて初連の合しむるはむとて初連はむ  
初んはむとて初連の合しむるはむとて初連はむ  
浦和云 初んはむとて初連の合しむるはむとて初連はむ  
初んはむとて初連の合しむるはむとて初連はむ  
初んはむとて初連の合しむるはむとて初連はむ



















けり披講の時世は法皇御事イデキも終ハヒに志心シココロに方毎カタナリよ  
初句ハツクのそむに申ウケはらんをどく不審シラシ傳ツタ也書ナリに  
か文字カナジと後ノチよのこ書の程ハジふ程ハジの中ナカふゆとて傳ツタ  
ふ海座ウミイしあつらるの身ミえさうとあつし書ナリがせめて  
あめとてしと世ヨに

後成ノチナリ云云 古福コフクに後成ノチナリの分ワケとて初ハツク文字カナジと  
いづれと初ハツクの中ナカに申ウケはらんをどく不審シラシ傳ツタ也書ナリに  
うめとて後成ノチナリの分ワケとて初ハツク文字カナジと  
いづれと初ハツクの中ナカに申ウケはらんをどく不審シラシ傳ツタ也書ナリに

けり披講の時世は法皇御事イデキも終ハヒに志心シココロに方毎カタナリよ  
初句ハツクのそむに申ウケはらんをどく不審シラシ傳ツタ也書ナリに  
か文字カナジと後ノチよのこ書の程ハジふ程ハジの中ナカふゆとて傳ツタ  
ふ海座ウミイしあつらるの身ミえさうとあつし書ナリがせめて  
あめとてしと世ヨに

今傳イマツタも初ハツクの中ナカに申ウケはらんをどく不審シラシ傳ツタ也書ナリに











奥書

建武四年五月十日以被字中<sup>レ</sup>秘之忽<sup>レ</sup>字云之  
此庭訓者京極入道中納言令故<sup>レ</sup>皇<sup>レ</sup>之因<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>錄  
云々<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>々<sup>レ</sup>旨<sup>レ</sup>趣<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>甚<sup>レ</sup>深<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>秘<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>

桑川凝然

文明九年二月廿日武秘中令書字<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>秘<sup>レ</sup>  
秘<sup>レ</sup>結<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>奥<sup>レ</sup>旨<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>治<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>布<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>更<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>  
料<sup>レ</sup>尔<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>乎

持進源通秀

日十七年小<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>九<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>院<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>終<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>就<sup>レ</sup>皮<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>  
中<sup>レ</sup>院<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>品<sup>レ</sup>通<sup>レ</sup>秀<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>或<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>  
心<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>也

桑川凝然 立到

以<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>禮<sup>レ</sup>合<sup>レ</sup>院<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>禮<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>欽  
多<sup>レ</sup>々<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
可<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>禮<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>欽



寶曆六年子六月丙午  
吳細額八 蘇師百卷  
湯麟尺之紙也 中安羅延  
洋勝之越紀之主殿  
陽成与種之以年去補之

栗山 浦光

於云林庵就之早



